

地球を学び、未来をつくる！

第二回 開発教育／国際理解教育コンクール

実践授業例部門 ・ 応募用紙別途資料

<指導案>

教科・分野 英語・LHR 題材 「モンゴル」からの学び

対象・人数 総合学科1年生 120名 学習時間 15～20時間

【実践のテーマ】「生きる力」を育てる国際理解教育

【授業の展開と指導のポイント】

- ・ 異文化やモンゴル理解と同時に、自国への理解とセルフエスティーム（自己肯定感）も深める。
- ・ モンゴル人の大切にしている考えなどから、私たちが学ぶべきことは何かを問いかける。
- ・ 遊牧民による羊の解体を通して、命の尊さや命をいただいて生きていることの重みを理解させる。余すところなく全て利用する遊牧民の生き方を通して命のリレーの意味を考える。
- ・ 多文化共生社会に生きているということ。文化や風習の異なった人々が共存する。互いの違いを認め合って、共生していくことの必要性。また、多角的な視点を持つことの大切さを伝える。
- ・ 国際協力や自分たちが将来できることを考えさせる。
- ・ 途上国への理解と関心、問題意識を高める。

異文化・国際協力・多様性を知る（異文化理解・国際理解）→発見・気づき→自己・自文化理解→振り返り→学び→よりよく生きる姿勢

「モンゴル」を通し、生徒の生き方や内面に響かせる。世界の仲間には様々な民族・文化があることを認識させ、異文化を受け入れる寛容さと広い心、相手を理解しようとする気持ちを養う。そして自国を理解し、他国にも目を向け、グローバルな視野で足元から行動できる人を育てる。

具体的な授業の構成

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1時限目：導入・興味喚起。 モンゴルってどんな国？ ねらい：興味を引き出し、イメージを膨らませます。	1) 国当てゲーム：訪問国（モンゴル）に関するものを提示して、訪問国名を当てさせる。 2) イメージ調査：モンゴルのイメージをグループで話し合い、9つに絞り、ランキングする。	1) モンゴルで収集したCD、新聞、写真、通貨、絵はがきなど。
2～3時限目：文化を知る。 ねらい：芽生えた興味関心を伸ばし、楽しさを与える。	1) Original Show & Tell：モンゴルで入手した面白いものをボックスに入れておき、順番に見せ、それが何であるか英語で答えさせる。2) ある程度意見が出たところで、それが何でどう使われるのか説明をする。3) モンゴルの地図を提示し、地理的特徴や気候などを説明する。	1) 2) 現地で購入した物 岩塩、アーロール、ミニチュアゲル、遊牧民の骨のおもちゃ等 3) モンゴルの世界地図
4時限目：異文化理解・体感。 ねらい：概要を「知る」のまとめとして、体全体で文化を感じる。	1) モンゴルのお菓子・岩塩を賞味する（味覚） 2) 民族音楽の鑑賞（聴覚） 3) 遊牧民のチーズを食べる（嗅覚・味覚） 4) 民族衣装を見る、触れる（視覚他）	現地で調達したもの 音楽CD、お菓子、チーズ、民族衣装 他
5時間目：モンゴル語にふれよう。ねらい：英語以外の外国語にふれ、視野を広げる。	CDを流し、モンゴル語の響きを鑑賞させる。 その後、基本的な挨拶用語を黒板に書き、生徒に発音させる。	モンゴル語が収録されたCD

6～7時限目：多面性・多角的視野。ねらい：全てに多面性があり、多角的視野を持つことの重要性に気づかせる。	1) モンゴルの全く異なる風景の写真を複数用意し、生徒に提示。そこから何が分かるか考えさせる。2) 都市と地方の違い・発展と伝統などについて。3) モンゴル日本センター所長の話（異なる二つの国）。	モンゴルで撮影した写真
8時限目：世界の多様性 ねらい：フォトランゲージで多文化共生社会を認識する。	グループ活動。国毎に5枚の写真を時間差で渡し、そこから読みとれることを話し合う。最後に、国毎の資料を配付。振り返り、新たな認識や情報を得る。	JICA フォトランゲージキット
9～12時限目：モンゴル遊牧民からの学び。ねらい：遊牧民の生き方から私たちが学ぶべきものを問いかける。	1) 突然の訪問客を受け入れる遊牧民のおもてなしについて 2) ゲルという居住空間（家族の絆、生きる上で必要な物とは、生きる知恵など） 3) 自然との共存（自然の癒し、生きる力、生活の工夫）	現地撮影したビデオ・写真 ゲルを紹介した本 「たくさんのふしぎ」
13時限目：命の尊さ・命のリレー。ねらい：羊の解体を通し、命を受け継ぐことやその重みを理解し、セルフエスティームを高める。	遊牧民による羊の解体から調理まで一連の映像を見せ、私達が他の生命の上に生きていることを実感させる。遊牧民はその家畜の全てを無駄にせず衣食住にあてることも説明。自分たちの命の尊さを再確認させる。	現地撮影したビデオ
14時限目：大切なもの。ねらい：私たちが生きていく上で大切なものを振り返る。	1) 自分にとって何が大切か、各自紙に書かせる。 2) モンゴル人のコメント（民族の誇り、母のおしっこは永遠の水、家族が最高の宝..）を紹介する。	モンゴルで聞き集めた話
15時限目：ネルグイ氏の生き方。ねらい：様々な事に頑張る彼の生き方から学ぶものを問いかける。	通訳のネルグイ氏と撮影した写真を提示し、彼の生き方を伝える。（貧しい家庭に生まれるが、ネルグイ基金により日本留学が実現。帰国後、活躍する一方、植林活動なども行う。）	現地で撮影した写真
16～17時限目：国際協力の現場。ねらい：世界で活躍するすばらしさと可能性、国際協力の意義を知る。	1) モンゴルで視察した国際協力現場を紹介・国際協力の意義にふれる。 2) 現地で汗を流す協力隊員・専門家・SVの方々の活躍や生き方を学ぶ。	現地で撮影した写真・ビデオ 現地で配布された資料 JICA ホームページ等
18～20時限目：まとめ。ねらい：モンゴルからの学びをまとめ、興味を持った点を深める。	「モンゴルからの学び」についての自らが執筆した新聞記事を読ませ、各自まとめさせる。 また、特に深めたい部分について調べ学習をする。	自分が執筆した新聞記事、 モンゴル航空機関誌、ガイドブック、図書資料、インターネットなど

<実践記録>

実践日時 2004年9月～2005年1月 場所 宮城県小牛田農林高等学校各教室

対象・人数 総合学科1年生3クラス合計120名

単元名 英語I、オーラルコミュニケーションI、LHR

学習時間 合計約10～20時間（クラスによって異なる）

【学習効果と授業の評価】

単なる「異文化理解」にとどまらない、人生を豊かにする学びの場にしたい、という思いで授業を行った。今回は、一つの国「モンゴル」に絞り、その素材を最大限に活用した。一連の取り組みで、生徒の視野を広げ、異文化を知ることの面白さ、世界への興味関心、問題意識を喚起することができた。どの活動でも、生徒たちの反応は大変良く、生き生きと楽しみながら意欲的に取り組んだ。グループやクラスの仲間と共に考えながら、互いに学び合うプロセスの中で、多くの「気づき」があったように思う。生徒たちの今後の人生に何らかのプラスのエネルギーを与えられたら、と考えて取り組んだ

が、それぞれの生き方や内面を見つめさせるきっかけを作ることができたように思う。「異文化理解」「自分理解」「グローバルイシュー」となんらかのアクション、それらが重なるところに、よりよく生きる姿勢や力が生まれると思う。自分自身も改めて、開発教育／国際理解教育のおもしろさ、やりがい、そして可能性を実感することができた。

今後も、あらゆる機会をとらえて、世界の多様な価値観を尊重し、地球規模的課題を理解し、考え、グローバルな視野に立って、身近なことから、足元から行動できる人を育てていきたい。そのために自己研鑽を怠らず、努力を重ねていきたい。

*上記の実践に加え、同じ素材を活かした他教科での実践例を研究実践報告書の中に書き加えた。

<添付書類>

応募用紙

研究実践報告書（含 写真）

ワークシート（添付資料1）

新聞記事（添付資料2）